

地球破壊：我々が待っていたウェイクアップ・コール

April 28, 2014

By: Unbounded Spirit (GeoengineeringWatch.org)



(我々の惑星とその生命維持システムは、上から下まで破壊されてしまった。我々はすでにその代償を払いつつあり、今後、代価は急速にさらに高騰するだろう。我々が取ることのできる唯一の最大の方向転換は、気象操作の事実を暴き、これをやめさせることである。人類はいま際限のない困難な問題を突きつけられているが、気象操作をやめさせることが、正しい方向への方向転換の巨大な一歩になるだろう——Dane Wigington)

気象変化否定論者が真剣にならねばならない理由

今週発表された最近 10 年の最大のビッグニュースを、読者が見逃しているかもしれないので言っておくと——我々のすべては死を宣告されている。地球温暖化とその影響に関する長く待たれていた論文が、国連の「気象変化に関する政府間委員会」(IPCC)によって先日、月曜日に発表されたところだが、これはきわめて恐ろしい読み物になっている。この最新報告が伝えようとしているのは、人類に対する歴史上なかった厳しい警告——我々は非常に暗く恐ろしい未来に直面しており、これを修正する時間はもうなくなったかもしれない——というメッセージである。

明らかになった重大なこと

この報告は、溶けていく海の氷と永久凍土層が世界の都市全体を沈没させる危険、海の酸性化が我々の貴重なサンゴ礁を死滅させていること、極端な天候パターンや、熱波、旱魃、洪水、台風、森林火災などのメガ災害が、悪化しつづけていることを警告している。これに、高度に危険な大気汚染や、地盤陥没、地震、地下水汚染、出生異常まで含めた **fracking**（水破壊）の効果、また進行中の、人間の愚かさによる生物の大量死滅を付け加えれば、事態は我々の孫たちにとって明るいものではないと結論できる。

「この惑星上の誰一人として気象変化の影響を免れる者はいないだろう」と、IPCC 議長 **Rajendra Pachauri** は暗い言葉を述べている。

食糧の欠乏、反乱、高騰する食料品

この専門委員会が 1988 年に設立されて以来、6 年に一度発行されているこの報告は、300 人以上の科学者による共同の努力によるものだった。これまでで最も警鐘的な最新の号は、編集に 3 年かかり、2,600 ページ、32 巻に及んでいる。それによると、たとえ我々が幸運にも自然災害による死を免れたとしても、農業の未来はあまりにも悲観的で、何百万の人々が餓死と移住に直面することになるという。小麦とトウモロコシの地球的な蓄えは大きな危険状態にあり、米や大豆のような常食料でさえ、高価なぜいたく品になり得ると言っている。

他の食品もまた危険にさらされている。熱帯地方のいくつかの領域では、魚介の収穫量が 40% から 60% 減少すると予想され、海産物が生計と生存の源である何百万の人々に影響を与えるだろう。そしてこの食糧不足は、広範囲な政情不安と暴動、そしてそれに関連する他の社会問題を引き起こすだろう。

結論として専門家たちは、人為的な気象変化はもはや議論の対象にならなくなったと言っている。**Richard Schiffman** が「ガーディアン」紙に書いたように——「世界の食糧生産者の間では、気象変化を疑う者はほとんどいない。農業生産者たちは、天候が激変していることを知るのに国連の報告を読む必要はない。そして消費者たちは、食品価格が上がり続けているのを知るのに、学術研究やその項目を探する必要はない。」

懐疑論

それはその通りだ。しかしもちろん、すべての人が IPCC の調査報告に合意するわけではない。懐疑論者が指摘するのは、我々は、いま我々が経験している地球の変化が人間によるものでないかどうかを確実に知るほど、長く気象パターンを測定も記録もしていない

ことである。また、我々は（もっともなことだが）国連を信用することはできないと主張する人々もあり、気象変化や自然災害をさえ説明するのに、HAARPのような天候コントロール技術の証拠を指摘する人々もある。これらはすべて正当な主張だが、それらが無視している単純で否定できない一つの事実がある——すなわち、人類はこの小さな青い地球を、限界を超えたサイコパスのやり方で、凌辱し殺し続けていることである。この環境殺しの振舞いに対して支払うべき代価がないと考えるとしたら、それは控えめに言っても、無知で愚鈍というべきである。

ひとつ考えてみていただきたい——地球の年齢は46億年である。尺度を46年に縮めてみよう。そのように考えると、人類がこの惑星上に現れてから4時間しか経っていない。我々の産業革命は、1分前に始まったばかりである。そしてそのわずか60秒の間に、我々はすでに世界の森林の50%以上を破壊した。これは、ある動物から片方の肺を摘出して、以前と同じ健康状態であることを期待するようなものである。

IPCCの論文発表から数日後、イエローストーン国立公園にマグニチュード4.8の地震が起こった。これは我々すべてに恐怖を植えつけるべきものだった。次に起こったチリ地震はマグニチュード8.2という強力なもので、地滑りと津波を引き起こした。

また今年、アメリカは東部が極渦（polar vortex）に襲われ、西部ではオーストラリアと同じ森林火災が起こった。一方、フィリピン（その低地の首都のマニラは高度に危険な熱帯地域）のような弱小国は、自分たちは「大災害を予想する」と宣言し、地球共同体の援助を要請している。

今年は、火山がハワイとインドネシアで噴火し、イギリスは記録上最大の洪水に見舞われ、続いて最近では、現在大きな懸念の的である前代未聞の“有毒”スモッグが発生している。これらの例はほんの一部だが、いかに世界中あらゆる場所で気象変化が起こっているかを例証している。

エネルギー・ロビイスト、操り人形の政治家、愛玩犬の連合メディア

我々はこの荒廃ぶりを見ることができる。それなのに、なぜこれだけ多くの人々が気象変化の現実に目覚めようとししないのだろうか？ それは、我々を眠らせておくために相当のカネをもらっている人々がいるからである。それが理由だ。次に、ガーディアン紙のコメント・スレッドから、ある眼を開かせる言葉を引用しておこう——「私はエネルギー政策問題を研究しているが、もうほとんど諦めている。問題の解決に反対するロビイスト集団があまりにも強力で、かつ幅広く存在する——すなわち、石油およびガス産業、グリーン・

ロビー（核発電に反対している）、ニンビーたち（Nymbys, 多くの地方の再生エネルギー計画に反対している）、炭素を抑えれば価格も抑えられると言って選挙民につけこむ連中、などである。」

ある最近の「ニューズウィーク」の調査がこの見方を保証していて、科学者たちは、石油会社ロビイストから、IPCC報告を傷つけ、その調査結果を覆してくれれば、返礼として金銭報酬（1万ドルらしい）が提供されていることを明らかにした。この雑誌はその結果をこのように述べた——「つい昨年の世論調査によると、アメリカ人の64%が、気象変化について“かなりの”科学者間の不一致があると考えており、地球温暖化は“主に人間の行動の結果”だと考える人々は3分の1にすぎなかった。」

これらの数字は、人間行動による気象変化を否定する科学者が極端に少ないという事実から考えると、ショッキングである。一方において、またしても起こったミシガン湖でのBPのオイル洩れ事故は、我々のテレビ画面から都合よく検閲され、欧州連合はイギリスに対し、再生可能エネルギー助成をやめるように命じ、スペイン政府は太陽パネルを使う人々に課税することを決定した。しかし、このような明らかな環境殺しの原因を作っておいて、これを否定しているのは、汚いエネルギー・ロビイストや政治家だけではない。メディア一般がそれを応援している。

我々の孫たちが、新鮮な空気が吸え、きれいな水が飲める惑星で成長することを保証するには、時はすでに遅すぎるかもしれない。しかし我々は希望を持ち続けなければならない。地球に法的権利を与えるというボリビアの画期的な決定は、我々自身の国でも要求しなければならないことである。今こそ目覚めるべき時、ガイアのために戦うべき時である。